

を斑葉にするに奇法あり、よく考へ見るべし。藪下の勇藏といふもの、羅漢松を砧たねとして、これに斑葉の品翁まきと呼ものを接置たり、砧よりも芽を生じたれど、又景色にもとすて置たれば、砧芽に實を結びたり、是を蒔たるに斑入二本青葉二本出たり、是に依り考るに、砧の勢を吸上る計りにてもなく、砧へも穂の氣を吸下るものと見ゆ、この例によりて外の品も接て試みたきものなり。

〔倭名類聚抄木十具〕花 爾雅云、木謂之華、戸花 草謂之榮、永兵 榮而不實、謂之英、於驚反、訓阿太波奈。

〔箋注倭名類聚抄木十具〕說文、華、艸木華也、又云、華、榮也、二字其義略同、後二字皆作華、無別、按說文、無花字、古蓋用葩字、說文、葩、華也、葩字、艸書、譌作花、蓋其體葩作能、是譌爲花之漸也、文選、琴賦注、引郭璞曰、葩爲古花字、

〔伊呂波字類抄波植物附植物具〕花ハナ、本作 華、今通用、 菁 華、二 繁 榮、草 榮、 茄 華、英 荼、已 上

〔撮壤集中〕花ハナ、華

〔圓珠庵雜記〕花ハナ はなとははじめをいへば、實にのぞめていふか、鼻の字をはなともはじめともよむにて思ふべし、

楊子方言云、鼻始也、獸之初生謂之鼻、人之初生謂之首、

蠡海集云、人之受氣而生、則先生鼻、鼻通肺主氣也、

野客叢書云、考法言、獸之初生謂之鼻、人之初生謂之首、梁益之間謂鼻爲初、或謂之祖、然則鼻與祖皆始之別名、以鼻祖爲始祖、似未爲是、凡人孕胎、必先有鼻、然後有耳目之屬、今畫人亦然、必先畫鼻、倭訓栞前編二十四四はな 花をいふ、春化ナルの訓義にや、神代紀に春を花、時と見ゆ、唐音にもはあといへり、單葉はひとへ也、千葉は音にてせんよといひ、又八重あり、樓子はやぐらざき也、筒子はつづざき也、花の雲、花の雪、花の波、花の瀧、花の袖、花の衣など、歌によめり、正花也、花五色といひて、獨